
【詩集】もがりぶえ

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【詩集】 もがりぶえ

【コード】

N6653Z

【作者名】

布袋しぐれ

【あらすじ】

布袋しぐれの詩集、第3弾。いつもご愛読ありがとうございます。徒然と心の赴くままに、書き連ねるこの詩集。どうぞお楽しみください。今回も詩集の題は、私の生まれの季語からつけさせて頂きました。

我が儘な愛

そう

初めてじゃない

数え切れない

恋の海

ダイブして

その切なさに溺れて

私がサーファーなら

いつになっても

波に乗ることをしらない

素人で

いいえ

分からない

覚えていないくらい

繰り返してる

お遊びめいた

この恋愛を

ねえ誰か

うまいこと並べて

おしゃれなジャズでも頂戴

おまけに思いつきりキツイ飲み物を

よく占いで出る

『浮気の恋に燃える』私

占いどおりね

人のモノが一番
良く見える
無いもの強請り
やめたいけれど
どうやらそこまで
私
賢くないみたい

そう
ほしいのは
温かなハグ
何度目の恋かしら
胸の高鳴り
抑えられそうも無いの
そう
こんなに隙を作っ
てあげているのに
こんなチャンス
ふらないで
ささげる愛には飽
きたから

誰か私を嫌と言
うほど
愛して頂戴

温かい季節

夢から

今なら醒めても

後悔しないかもって

いつかのプリンセス

まだ毒のリンゴ

吐ききれないみたいね

こんな季節に

あわてて準備なんかして

もっと早くからするんだっただって

どこかのサンタのおじさん

外ではトナカイが待つてる

暇を持て余しているみたいね

赤と緑と白と

派手な色合いにその身を包んだ

街

綺麗なネオンの遠く

幸せな声が聞こえる

そんなに慌てて

流れていく星たち

煌いて光を放って

私もあんなに輝けたら良いのに

星たちに嫉妬してるみたいね

今

街中は温かな幸せに囲まれた
温かい季節

戯言

気まぐれに
呟いて
あなたへの
空虚な告白

いないあなたに
届かない声は
無意味なのに
どうしてこんなに
唇に乗せたい音なんだろう

まるで麻薬のようね
媚薬のような
温かい言葉
ほしい愛もままならないのに
ほしい愛も手に入らないのに
どうして
辛くないんだろう

心にぽっかり開いた穴は苦しくて
痛くって
葬り去ろうと
私の頭

考え付いたみたいね
ああ
まるで人形みたいに

さあ
求めてよ
求めるままに
甘美に
優雅に
時に大胆でふしだらに
舞って差し上げましょ

嘘でいい
憎いあなたでもいい
私に
愛していると
囁いて

聖なる

こんな冷たい
嘘つきピエロみたいな
風に吹かれて
聖なる夜に
生れ落ちる命は
まるで
あなたのような

汚れなき
あの雪のように
しずしずと
綺麗に
降り積もって

こんなに冷たい夜は
まるで冗談だと
告げてみたいに

感傷にひたるためにあるみたいな日
なのに人は
会い
楽しむ
楽しげな声
楽しげな姿

街中は綺麗に
ペイントされて
キレイじゃないけれど
一人じゃ歩きたくない
関係ないことも
考え込んでしまいそうだから

キレイじゃない
すきでもない
このイヴの日に
願い事はただひとつ

口実

よく言うよ

お前は中々口達者だ

そういうお前もよく言うよ

そうやって酒を飲み交わす

大人たち

上手い事言って

こんなご時勢だから

ちよいと

引っ掛けようっていう

魂胆でしょう

上手いこと言ったな

お前も上手いこと言ってきたんだろう

そういうお前は何て言ったんだ

そうやって言い訳の口実を探しあう

大人たち

どうやって言い逃れてきたのか

ありきたりだけれど

次の口実

しきりに探してる
新しい口実探して

サンタも忘れた
疲れた大人たち
そうね

おねだりするなら
口実を考えてくれるものがないんじゃないかしら

課長に呼び出されちゃって
いや後輩が仕事でな

言い訳口実
たまには正直に

飲みたかったのさ

そういつてもバチはあたらないうんじやないかしら

ディア・パトロン

親愛なるあなたに

叶えたい夢があるの

ひとつじゃない

ふたつ

みつつ

数えていたら

多分キリはないわ

小説家になりたい

一番強い射撃の名手になりたい

有名になりたい

世界中をめぐる

それを本にしたい

絵を描いて

アトリエだって持ちたいし

それを画廊に飾りたい

ダンスも好きなの

歌も好き

いつか大きな舞台で

ミュージカルにも出たい

夢がいっぱいあるの

数え切れないくらい

エゴな夢ばかりじゃないわ

いつかあの団体に

莫大なお金を寄付して

名前を名乗らずにおいてみたいわ
かっこいいじゃない

だからそこまで儲けなくつちや
頑張らなくつちや

初期投資って痛いよね
誰か手伝ってくれない

ねえ

親愛なるあなた

私の才能に賭けてみない

あなたが出し惜しみすることなく
協力してくれるというなら

私はあなたに

私の与えられるもの全てを
差し上げてよ

強く

少しでも

強くありたいと願うのは

少し

悲しいちっばけな

意地のせいなのだろうか

踏みにじらないで

このまま

私は

私らしく夢を抱いて

歩いてゆきたいの

邪魔をしないで

誰も

許されない

真実は

甘い果実みたいに

人を誘うから

そんな誘いを

人は罪という

罪など無い

あるのは幾多の畏だけ
かかって

落ちて
そして
それを罪と言って
勝手に
悪い扱い
自分勝手にも程があるのよ

抱きしめて
嘘じゃない
こんな世界中
あなただけが本当の強さだと

あなたの背中だけずっと
追いかけてきたのよ

またあのときみたいに
あなたは
ただの踏み台になるのね

ああ
足りないもの
それは
強すぎる
激しい刺激
それがほしい
強くなりたいから

私こそが
最高だと
エンペラー夢見た
愚かな人間だと思えばいい
けれどいつか
君臨してみせる
この強さで
この鋼にも負けない
信念で

まるで記憶のサイクルの中に落ちたみたいな
見慣れた後姿に
胸がドキリとした

名簿につづられた
少し乱れた字
全然予想もしてなかった
知らない人の名に
少し落ち込んだ

この町のどこかに
今でもあなたが住んでいて
再び
会えること
心のどこか
奥深く隅の方で
期待してたの

あまりに幸せ
満たされた日々だったから
頭に張り付いた
この記憶離れないの

初恋の頃

童心に戻ったみたいに
それは綺麗な記憶の底
掘り起こして

懐かしさと共に

こみ上げてくるのは

寂しいな

会いたかった気持ち

今頃

どこかで

元気にしてるんだろっかって

あの頃みたいに

話すことができたらいいのに

初めて好きになって

まるでカーテンの隙間から覗いているみたいに

それは見えづらくって

これが恋というのね

あなたを知って

色づき始めた

13の頃

貪る愛情

ほしいのは
母のような
献身的な愛情ではない

ただ燃え盛る
業火のような
激しい愛

ほしいのは
父のような
間接的な優しさではない

ただ力強く
後押ししてくれるような
そんな光

ほしいのは
恋人のような
お互いを支えあう愛情ではない

ただ火を噴いて
恐ろしいくらいに

この世を抱く自然のように
力強く
真っ直ぐに
素直で
大きな
愛情

飢えている訳じゃない
そう答えたら
これは嘘

愛されたいなんて
誰にでもあるだろうけれど
私はそれじゃ
満足できないまで
麻痺して
飢えて
ただ欲して

愛して
けれど決して汚さないで
愛して
優しく力強い光の中で
そうして私を導いて

きつとよ

蔑まれて
土足で踏み躪られて
この心
抉られて
生きてきたせいね
呪縛していた
私以外の
輝く女たち
裏側はとても醜かったのに
あらま
隠すのがお上手なこと

長らく
無愛想で通してきたわ
私は無愛想で
ちよつと気取つた勘違いレディーみたいに

長らく
笑つて無かつたわね
あなたの前で
私は気取ることなく
ただ他の女と同じように
笑つて話して
ねえ
随分変わったみたいでしょ
けれど
私が剥いだのは
他の女たちと私の仮面

後は貪るだけ
準備は出来たの
数多の愛情が必要よ
罨も飴も何もかも
撒いておいたから
もう心配要らないわ

耳を塞いで

声が聞きたい
あなたの声が

燃え上がるような
こげるような

情熱が

この胸に
ときどき

唐突として燃え上がって

焼けるみたいに

痛いこの胸が

騒がしく鼓動を打つ

うるさい

この胸が騒がしい

静かにして

気付かれちゃうんだ

あの人に気付かれそうなほど
騒がしいこの胸が

裏腹に騒がしい

この胸のうちが

私の知っている私じゃないわね
私の知っている私のいつもと違う
キラリじゃないけれど
スキでもない

お願い

静かにして

耳を塞いで

聞こえないフリ

あまりにも必死で

笑えちゃうくらい

耳を塞いで

耳を抱いて

そうして夢を見た

私は耳に針を刺して

針を数え切れなくらい刺すと

頭の歪む錯覚を覚えて

抜かなくちゃ

無意味な夢の中

抗ったけれど

不思議と

中々外れない針に

痛みを覚えて

苦しんだ

心臓がうるさい
鼓動がうるさい
あなたへ向う
この生きている証が
うるさい

蔓延り廃れ

美しくない

面白くない

良いものじゃない

善意じゃない

形が見えない

透明じゃない

ああまるで

嘘つきピエロのみせる

うその世界みたい

何よこれ

同じものに溢れて

どのページをめくっても

ダメ

ダメ

ダメ

これでも芸術家の端くれなの
疑いたくなる

私が憧れた世界は
もつと

妖艶で

美しく

もつと

日本語独特のミステリアスさと

きらびやかさが

あつたはずなのに

蔓延る文学に

落胆する

つまらないなあと

そうして古い書籍に手を伸ばし

ああ

あの頃の言葉は

美しかったと

蔓延り

廃れる文学に

嫌気が差したんだ

抱きしめた光

苦しくて
抱きしめたの
暗い
闇の中で
もう何も
見えないから
まるで そう
目隠ししてるみたい

唄が聞こえる
祝福の唄が
あなたの声によく似た
優しい声

鼓膜の深くに
響くような
優しい
声で
私に囁いて

轟轟
呼ぶ音は
まるで
目を覚ませと

そう 言っているみたいね

苦しくて

息苦しくって

辛く重たい

闇の中

もう全て

終わらせたいから

まるで そう

永遠の眠りを待っているの

眠り姫でもないけれど

たったひとりの

白馬の主

待っているの

あなただけが

光を持ってきてくれると信じて

救い上げてくれると

信じて

チョコレイト・チョコロン(前書き)

チョコロン・・・韓国語で『』のように』にあたる言葉。発音的には『チョコロン』と『チヨロム』の間くらい。正しくはtyoromくらいですが、『ン』にしました。

つまり意識はチョコレイトのように(または、チョコレイトみたいに)

チョコレイト・チョコロン

せっかく

女の子に生まれたんだから

楽しまなくちゃ

損ってモンでしょ

ファッション

メイク

アクセサリー

毎日

新しい刺激が溢れてて

心地よい

まるで水を得た魚みたいに

すいすい

生きていたい

せっかく

こんなに自由に生きてるんだから

私らしくなくっちゃ

私が勿体無いわ

髪を伸ばして

ダンス

そして射撃に

いっぱい

男らしくたって
構わない
それはそれで面白いじゃない
男の中なら
どろどろしてないもの

疲れちゃう

女の子

チヨコレイト・チヨロン

甘くて

綺麗で

魅力的だけれど

中身はマシユマロ・チヨロン

そんなに優しくない

何が入っているの

とっても苦くて

辛くて

ああ

見かけに騙されちゃった

噛り付いて

不味くって

女の子

チヨコレイト・チヨロン

たまにはスイーツらしい

女の子に出会っけれど

確立は低くって

チヨコレイト・チヨロン

それほど甘くないの

せっかく

女の子に生まれたんだから
綺麗に着飾らなくっちゃ
私が勿体無い

このまま終わるには

シンデレラも

まだ早いつて

そう言ってるから

チョコレート・チョコロン

そんなに甘くない

世の中に抗う為

武装した

チョコレート・チョコロン・ヨジヤ

生きていく為には仕方ないのよ

チヨコレイト・チヨロン（後書き）

ヨジャ・・・韓国語で女の子にあたる言葉。

SENSEI

先生

初めて口を利いたその瞬間から

先生

ありきたりね

こんな話

後輩たちを乗せた車が

後からついて

ゆっくりと

山道

登って来る

そのハンドルさばき

少し後輩たちが

羨ましかった

好きですよ

そんな言葉

口が裂けても言えないから

頑張つて挨拶するだけ

「こんにちは」

それが精一杯

先生

初めて口を利いたその瞬間から

先生

初めてよ

こんなに好きになったのは

純粹な

片思い

このままもう少し

好きでいていいでしょうか

先生

今純粹にこの気持ち胸に

先生

好きだから

あと少し見つめてること

許してね

先生

もう少し

もう少しだけ好きでいさせて下さい

不純物

水にも

油にも

何にも溶けない

何にも混ざらない

まさしく

それ

人間の造りだした

不純物

ふわりふわり

何事も無かったかのように

ふらついて

浮ついて

綺麗で醜くて

分かりやすく捕えやすくて

分かりにくくすり抜けやすい

それはまるで

この世に取り残された

最後の不純物

綺麗で醜くて

それってまるで
血に汚されたダイヤみたいね
そう曇らせて

意味不明

機械仕掛けの

この時代に

ねじの1本でも飛んでくれって
願ってみたりする

不純物は

やがて沈むことを願うんだ

漂うことを忘れる為に

YOU

君は『大丈夫』だと
そう言っつて

あのときみたい
に
半ば

強制的に
力
ず
く
で
この背を押すね

私が倒れそうなの
知
っ
て
る
の
私
が
弱
い
こ
と
も
知
っ
て
る
の

分
か
っ
て
る
フ
リ
し
て
ブ
チ
っ
て

ねえ
寄
り
か
か
ら
な
い
と
生
き
て
い
け
な
い
人
間
だ
っ
て

私
は
そ
う
だ
っ
て
知
っ
て
る
で
し
よ

君に寄りかかれたら
きつと最高でしょうね
あなたの横に
やがて肩を並べる
女性が羨ましい

本当の愛を
取り逃がしてばかり
馬鹿で
愚かで
疎い私

あのときみたいに
優しく抱きしめて
私に
優しい声をかけてほしいの
凍えた手を
驚きながらも
ぼやきながらも
ゆっくり温めて欲しいの

忘れられないの
あの日が
嫌いだったあなたが
恋しいなんて
まるで笑い話
でも

本当に
忘れられない
あなた

追憶の言葉（前書き）

早期退職された、国語科の先生・・・

色々お世話になりました・・・

随分と前の記憶

追憶の言葉

あの日

あのひと夏で

去った師匠を

私は中々

忘れられなかった

師匠せんせいに染み付いた

チヨークのにおい

優しく微笑むその姿に

どこか儂さを覚えて

ねえ

どこにも行かないで

辞めないで

そう言えたら楽だったのに

師匠せんせいは行ってしまわれるのね

人は誰しも

生き得る限り

出会いも別れも

経験するけれど

その経験に

必死にすがって

生きていけない

歩き出せない
取り残された”私”

頭のどこかで

身体の中

時計は13のあのときから

止まったまんま

動き出せないんだよ

抱えた思い出

多すぎて

歩き出せない

置いて行った思い

多くて

抱えきれなくって

歩き出せなかった

手を差し伸べる

優しいあなたも

またすぐに私の目の前から消えて

ああ

すごく遠く

もう背中しか見えない

師匠せんせいも

そんな一人だと

分かっているつもりなのに
どうして
忘れられないのだろう

強く

絶対に負けない
屈してたまるもんかって
そうやって今まで
這いつくばって
一番低いところ

屈辱的な

日常にsay goodbye
もう振り向きもしないから
一番低いあの場所に
もう多分戻らないと思う

気にしないで
私のこと
もっと先に進むつもりよ
邪魔しないで
私の道
行く先憚っても

進めるから
希望もあるし
もう何も怖くないのよ
強くいれる
あなたがいるから

どんなに辛いときも
心にいるあなたの存在で
強くいれる
強がりじゃなく
立ち上がれるたくましさを
あなたが
私にくれたから

見栄張り

ほっそりとした

高く急斜面な

そんなヒールに足を入れて

危うく滑りそうになって

慌ててすまし顔

そんな人

いっぱいいる

ミニスカートから覗く

その足に纏うタイツ

寒いのがマンで

寒そうね

寒いわよ

今日は頑張ったのね

張り切ってみたの

それ新作なの

そうなの

高かったでしょ

まあね でも奮発しちゃって

けれど足も

すぐにお肉がついちゃって

だから

すぐにダイエットに逆戻り

そうして必死に痩せて

またその足を通す

晒してこそその脚でしょ

晒してこそその見栄でしょう

そのためならば

多分

ガマンは厭わない

だって

女ですもの

渴き

正直

こんなに渴いていると思わなかった

カラカラだった

太陽にあてられすぎてたみたい

熱い

ひりひりと痛むこの渴きは

パリパリに張り付いているみたい

少し文面に目を通す

息を吐いて

落ち着いてから思った

あらま

無駄な思考が頭を占めてるって

満足してないな

渴きが癒えない

苦しくなってくる

だんだんと

ゆっくりと

まるで

砂漠のように

じんわり奪われる満足感

出来ればもう少し

天国の園にいて

満足したまんまでいたかったなあって

どこか自堕落な私が咳く

意味もなさげに

けれどはつきりと

本性

馬鹿にしないでよ
指先でつままないで
これは注意じゃなくて
ただの君への
最後の警告

生半可に扱わないで
私は玩具じゃない
少し弄んでポイとか
そんなのしたら
痛い目見るわよ

純粹に求める
愛情くれなくたって
君じゃなくても
もっと素敵な
プレイボーイ
溢れているの

簡単に済ます
片手のラヴ・ディッシュ
愛のフルコース
ときどき必要だから

どんどん過激になっていく
満足できないだけ

こんな片隅
渴いたまんまじゃ
潤いも無意味
渴いていくだけ

片手で弄んで
適当にさよならなんて
馬鹿にしないで
決定権は私に頂戴

いいえ
決定権は私にあるわ
生意気
偉そう
強情

そういう君もそうだもの
人間本来の姿
それが
私

孝行

その二文字

それに収まる言葉なのに

行うのは難しい

いつもいつも

おかげで食っていけるといふのに

どうしても辛く当たってしまつときがある

良心が痛む

本心も無いことが口から出てくる

手が足が

震えて

これは悪いことだと拒絶する

難しいね

いつの日かって

約束したね

あなたたちの行きたがっていて

北海道旅行

私がいつか

連れて行ってあげるからねって

無理をして

ガタのきている

父の背中

あんなに小さかったっけ

あんなに細かったっけ

遅しかなかったっけ

歳を得ること

最近

怖くてたまらないんだ

孝行って

その二文字に収まる癖して

行うのは至難の業

いつか上手くできるかな

あなたたちのために・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6653z/>

【詩集】もがりぶえ

2012年1月6日18時45分発行